

渡殿の戸口の局に見出だせば、ほのうちきりたる朝の露もまた落ちぬに、殿ありかせ給ひて、御隨身召して遣水払はせ給ふ。

橋の南なる女郎花のいみじう盛りなるを、一枝折らせ給ひて、

几帳の上よりさし覗かせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに、我が朝顔の思ひ知らるれば「これ。遅くてはわるからむ」

とのたまはするにことつけて、硯のもとに寄りぬ。

女郎花さかりの色を見るからに露の分きける身こそ知らるれ

「あな、疾」

と微笑みて、硯召し出づ。

白露は分きても置かじ女郎花心からにや色の染むらむ

## 【読解】

### ■場面設定

時間……（ ）

季節……（ ）

### ■登場人物

筆者（紫式部）……庭の様子を【 】

自室として【 】の【 】を与えられている。

殿（＝道長）……庭を歩いて、お供の人に遣水の掃除をさせる。

橋の南にある【 】

一枝折って渡す

「

」

（筆者）歌 女郎花 さかりの色を見るからに

露の分きける身こそ知らるれ

（殿）「 ……満足！」

返歌 白露は分きても置かじ 女郎花

心からにや色の染むらむ

### ※女郎花の本意

女性、戯れの恋の相手